

ヨハネの手紙第一2章18節 「反キリストの現れ」

1A 幼子に対する使信

2A 終わりの時

1B 使徒たちの教え

2B 終わりの日を嘲る者たち

3A 反キリストの出現

1B キリストに取って替わろうとする者

2B ダニエル書の「荒らす忌まわしい者」

1C アンティオコス・エピファネス

2C 多くの者と契約を結ぶ者

3C 全てに優って自分を引き上げる者

3B 他の預言者、主ご自身、使徒たち

1C 愚かな牧者

2C 自分の名で現れる者

4B 黙示録の「獣」

1C 獣の像

2C 大淫婦を乗せる者

3C 全軍隊を率いる反キリスト軍

4A 多くの反キリスト

1B 反キリストの霊

1C ニムロデ

2C ネブカドネツアル

3C アンティオコス・エピファネス

4C 後世の指導者

2B 引き止める者

本文

ヨハネの第一の手紙 2 章を開いてください。今晚の学びは、2 章 18 節になります。「**幼子たち、今は終わりの時です。反キリストが来るとあなたがたが聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現れています。それによって、今は終わりの時であると分かります。**」

前回、使徒ヨハネは、世を愛してはいけないという戒めを与えたところを読みました。それは、サタンが支配しているところの世であり、神の反抗する制度、成り立ち、考え方を現しているからです。そこでヨハネは、世において、サタンの力と権威と位を受ける、悪の権化が終わりの日に現れることを告げています。それが、反キリストです。「**反キリストが来るとあなたがたが聞いていた**」と言っ

ている通り、既に教会の人たちは、反キリストの現れが教えられていました。今日の教会で、反キリストについてどれほど教えられているのでしょうか？

1A 幼子に対する使信

まず、ヨハネが、「**幼子たち**」と呼びかけているのに注目してください。2章 12-14節で、子どもたち、父たち、若者たちに呼びかけたのを思い出してください。その時に、幼子たち、とも呼びかけて、「**私があなたがたに書いてきたのは、あなたがたが御父を知るようになったからです。**」と言っています(14節)。主イエスを信じて間もない人たちに、終わりの時をすでに教えていたのです。

18節からの反キリストについての教えは、25節まで続きます。その中で、ヨハネが強調しているのは、「**みな真理を知っている**」ことです(20節)。主を信じたばかりの者であっても、御霊によって父なる神を知りました。聖霊によってすでに教えられているのです。惑わす者たちが現れても、主のものとなっている者たちは、その与えられた知識に留まっている限り、守られるということであり、惑わす者たちは、知識を持ってきて惑わします。「あなたは、まだこれらのことについて知らないのだ、これが知識だ。」として、まだ知識が足りないと思っている救われたばかりの人たちにとこころに来て、騙すのです。そこで、幼子たちと呼びかけて、強調しています。

2A 終わりの時

1B 使徒たちの教え

「**今は終わりの時です**」と言っています。終わりの日について、幼子たちに使徒ヨハネは教えています。これは、パウロもテサロニケ人への第二でも語っていることです。パウロは、反キリスト、不法の人について、終わりの時に起こることを2章で語っていますが、「2:5 **私がまだあなたがたのところ**にいたとき、これらのことをよく話していたのを覚えていませんか。」テサロニケの人々に対して、パウロは一か月そこそこしかいることができなかつたと言われています。つまり、その短い期間に、パウロは終わりの日について語ったということです。どれだけ、今日の教会が、いや教会史においても、終わりの日について教えてこなかつたのか知れません。

教会は、「使徒たちの教えを堅く守る」存在であります(使徒 2:42)。使徒たちは一貫して、終わりの時を語っています。聖書自体が、また主ご自身が、終わりの日について語っておられたからです。旧約聖書では、実に、創世記に早速「終わりの日」が出てきます。ヤコブが死ぬ間際に、預言したのですが、「私は、終わりの日に、おまえたちに起こることを告げよう。」と言っています(49:1)。そして預言者たちは、「主の日」と呼んで、終わりの日を語りました。イエス様も、オリーブ山などで終わりの時について語られましたが、使徒たちはその教えを受け継いでいるのです。

パウロが、ローマ人に伝えました。「13:11 さらにあなたがたは、今がどのような時であるか知っています。あなたがたが眠りからさめるべき時刻が、もう来ているのです。私たちが信じたときよりも、今は救いがかっと私たちに近づいているのですから。」テモテへの手紙第二 3章 1節では、「終

わりの日には困難な時代が来ることを、承知していなさい。」とあります。主が戻って来られることについて取り上げたら、何十とあります。そしてペテロも、第一、第二の手紙ともに、終わりの日を語っています。「Ⅰ ペテ 4:7 万物の終わりが近づきました。ですから、祈りのために、心を整え身を慎みなさい。」そして、ヤコブも手紙で語っています。「5:8 あなたがたも耐え忍びなさい。心を強くしなさい。主が来られる時が近づいているのからです。」ユダの手紙にも書いてありますし、使徒たちの手紙で、終わりの日と主の再臨を書いてないもののほうが珍しいぐらいです。

2B 終わりの日を嘲る者たち

ところが今日、終わりの日について語ることが、まるで狂信者であるかのような嘲りの空気があります。実は、そのように嘲る者たちが出て来るということ自体が、予め伝えられています。「Ⅱ ペテ 3:3-4 まず第一に、心得ておきなさい。終わりの時に、嘲る者たちが現れて嘲り、自分たちの欲望に従いながら、こう言います。「彼の来臨の約束はどこにあるのか。父たちが眠りについた後も、すべてが創造のはじめからのままではないか。」」この世にあるものは過ぎ去るというのが、神の教えであり、私たちは世を愛してはいけなさとされているのに、この世の楽しみを求めたいので、終末なんていうことは起こらない。そういうことを言うのは狂信的だとなるわけです。けれども、使徒の教えを受け継いでいる私たちにとって、それは看過できない態度です。

3A 反キリストの出現

1B キリストに取って替わろうとする者

それでは、終わりの時に現れる、反キリストとは何か？をご説明します。ギリシア語では、「反キリスト」の「反」は、必ずしも反対という意味ではありません。「取って替わって」という意味合いもあります。キリストの代替であり、偽物といってよいでしょう。キリストの与えられるような約束、平和であるとかをしておきながら、その正反対のかつてない禍をもたらす者であります。

イエス様が、誘惑を受けられた時に、サタンは、こんなことをしました。「マタ 4:8-9 悪魔はまた、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての王国とその栄華を見せて、こう言った。「もしひれ伏して私を拜むなら、これをすべてあなたにあげよう。」」サタンが、自分を拝みさえすれば、自分の支配しているこの世を与えようと言ったのです。主は、誘惑を拒まれました。確かに、世はキリストのものとなります。けれども、それはご自身のいのち、その血が流されて、その対価をもって初めて可能になるのです。近道を通して世界を得ても、人々の魂は救われません。けれども、終わりの日に、サタンのこの誘いを受ける人物が現れます。「黙 13:2 私が見たその獣は豹に似ていて、足は熊の足のよう、口は獅子の口のようであった。竜はこの獣に、自分の力と自分の王座と大きな権威を与えた。」竜、すなわちサタンの力と王座と権威を与えられるのが、反キリストです。つまり、「十字架なしの救い」です。これこそ偽物です。福音の真理を受け入れず、それで救われるという代替の救い、偽物の救いを提供するのです。キリストの十字架なしの平和。キリストの十字架なしの正義。キリストの十字架なしの愛。正義や平和、愛というものが偶像化し、すべてがキリストから来ていることを否定し、むしろ敵対的でさえある、この世の流れがあります。その先には、

反キリストの現れがあるのです。

2B ダニエル書の「荒らす忌まわしい者」

具体的に、反キリストの現れを預言している最初の人、ダニエルです。ダニエル書に注目しなければいけない理由は、イエス様ご自身が語られ、ダニエルの預言に注意すべきであることをマタイが言及していることです。「マタ 24:15 それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす忌まわしいもの』が聖なる所に立っているのを見たら——読者はよく理解せよ——」そして、前代未聞の大患難が来ることを主は予告されています。

ダニエル書では、2章でバビロンの王ネブカドネツアルの見た、人の像の夢があり、7章では四頭の獣が海から現れる幻をダニエルが見ています。どちらも、同じ内容であり、バビロン以降の世界を支配する帝国の興亡を表しています。バビロンの次にペルシア、ペルシアの次にギリシア、ギリシアの次にローマです。そして、ローマのところ長い期間になっていて、その後の歴史がローマの影響を引きずりながら続くことを示唆しています。そして、復興ローマが興されて、その中に現れる人物が、世界に荒廃をもたらすことが預言されています。しかし、そこで主なるキリストが来られて、その人物の支配する世界を粉々に砕き、永遠の神の国を建てることを預言しているのです。

7章では、第四の獣から小さな角が出て、「人間の目のような目があり、大言壮語する口があった」とあります(8節)。彼のすることを、天使ガブリエルが解き明かします。「7:25-26 いと高さ方に逆らうことばを吐き、いと高さ方の聖徒たちを悩ます。彼は時と法則を変えようとする。聖徒たちは、一時と二時と半時の間、彼の手に委ねられる。しかし、さばきが始まり、彼の主権は奪われて、彼は完全に絶やされ、滅ぼされる。」人間の目を持つということは、とても知性がある、賢い人物ということです。口が大きいのは、言葉で人々を惑わします。そして、人間至上主義でもって、神を冒瀆していきます。そして、信仰を持つ者たちが悩まされます。彼は、時と法則、つまり、今までの秩序を変えてしまいます。そして、終わりの日、大患難の日生きる聖徒たちは、彼の手の中に入れられ、殉教していくのです。けれども、主キリストが来られて、彼を滅ぼします。

1C アンティオコス・エピファネス

そして8章では、似たような幻なのですが、ローマからではなくギリシアから出て来る王がいます。「8:9-12 そのうちの一本の角から、もう一本の小さな角が生え出て、南と、東と、美しい国に向かって、非常に大きくなっていった。10 それは大きくなって天の軍勢に達し、天の軍勢と星のいくつかを地に落として、これを踏みつけ、11 軍の長に並ぶほどになり、彼から常供のささげ物を取り上げた。こうして、その聖所の基はくつがえされた。12 背きの行いにより、軍勢は常供のささげ物とともにその角に引き渡された。その角は真理を地に投げ捨て、事を行って成功した。」分裂したギリシア帝国の一つ、セレウコス朝からアンティオコス・エピファネスが登場します。彼が勢力を増して、ユダヤ人たちに対して徹底した迫害を加えます。ユダヤ教を根本から否定させて、ギリシアの宗教や習慣を強制的に行わせようとします。割礼を受けた赤ん坊は母親と共に殺されます。そ

してエルサレムの神殿では、祭壇に豚を捧げるように命じ、ゼウス神を立てさせます。これが、「荒らす忌まわしい」ものであり、終わりの日に現れる反キリストのすることの予兆のような出来事だったのです。

2C 多くの者と契約を結ぶ者

そして9章です。ここに、7章に出て来た第四の獣の小さな角が、アンティオコス・エピファネスのようなことをするという、7章と8章を合体したような預言が展開します。ガブリエルがダニエルに、ユダヤの民とエルサレムの都については七十週が定められていて、その時に聖所が回復すると神の約束を伝えました。その時はまだ、ペルシアの王キュロスがユダヤ人を解放したばかりで、エルサレムは70年後も、バビロンによって滅ぼされたままになっていたからです。けれども、62週と7週の後、つまり69週目には、油注がれた者が断たれて、その後は荒廃があると語っています。この「週」とは七年間のことで、69週とは483年のことです。ちょうど483年後に、イエス様がエルサレムに入城されて、その数日後に十字架刑に処せられました。そして、「9:26次に来る君主の民が、都と聖所を破壊する。」とあります。ローマの民が、紀元後70年にエルサレムと神殿を破壊しました。「その終わりには洪水が伴い、戦いの終わりまで荒廃が定められている。」とあります。エルサレムには、異邦人がどんどん押し寄せて、踏み荒らされて、長年のこと荒廃していました。前世紀になってからユダヤ人が世界各地から帰還し、1948年にイスラエルを建国して、67年にエルサレムを奪還するまで、そのようでありました。

69週が終わったら、長い期間、空白があるように書かれていて、そして9章27節です。「彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物をやめさせる。忌まわしいものの翼の上に、荒らす者が現れる。そしてついには、定められた破滅が、荒らす者の上に降りかかる。」最後の週、第七十週は、荒らす忌まわしい者が、ユダヤ人の多くの者と契約を結ぶところから始まります。半週というのは、三年半のことです。初めの三年半は、ユダヤ人が神の宮を建てるのを許して、いけにえの儀式が再開されるのですが、後半の三年半において、「いけにえとささげ物をやめさせる。忌まわしいものの翼の上に、荒らす者が現れる。」という預言が成就します。このことを、イエス様がマタイ24章で、『「荒らす忌まわしいもの」が聖なる所に立っている』という預言のことなのです。

3C 全てに優って自分を引き上げる者

ダニエル書11章には、自らが神であるとして、拝ませることが預言されています。「11:37-38 彼は先祖の神々を心にかけず、女たちの慕うものも、どんな神々も心にかけない。すべてにまさって自分を大いなるものとするからだ。38 その代わりに彼は砦の神をあがめ、金、銀、宝石、宝物をもって、彼の先祖たちが知らなかった神をあがめる。」パウロは、主ご自身の警告と、このダニエルの預言を鑑みて、テサロニケの人たちに、次のように教えていました。「Ⅱテサ2:4 不法の者は、すべて神と呼ばれるもの、礼拝されるものに対抗して自分を高く上げ、ついには自分こそ神であると宣言して、神の宮に座ることになります。」そして、黙示録でさらに詳しく、この荒らす忌まわしい

者の行動が預言されています。

3B 他の預言者、主ご自身、使徒たち

このようにして、預言者たち、主ご自身、そして使徒たちが預言していったのです。

1C 愚かな牧者

ダニエルの他に、ゼカリヤも「愚かな牧者」として反キリストを預言しています。「11:16-17 見よ。それは、わたしが一人の牧者をこの地に起こすからだ。彼は迷い出たものを尋ねず、散らされたものを捜さず、傷ついたものを癒やさず、衰え果てたものに食べ物を与えない。かえって肥えた獣の肉を食らい、そのひづめを裂く。17 わざわいだ。羊の群れを見捨てる、能なしの牧者。剣がその腕と右の目を打ち、その腕はすっかり萎えて、右の目の視力は衰える。」

2C 自分の名で現れる者

この預言は、まことの牧者である主ご自身を、羊飼いたちが拒み、銀 30 シェケルで売られるという預言の直後にあります。そこで主は、このことを思いながらでしょう、次のことを言われました。「ヨハ 5:43 わたしは、わたしの父の名によって来たのに、あなたがたはわたしを受け入れません。もしほかの人がその人自身の名で来れば、あなたがたはその人を受け入れます。」父の名で来られた主をユダヤ人指導者は拒んだので、その後で来る、自分の名で来る者は受け入れるのだということです。ユダヤ人が反キリストを受け入れてしまい、その後で正体を明らかにして、ユダヤ人が大患難の中に巻き込まれるのです。

4B 黙示録の「獣」

それで、黙示録にある、荒らす忌まわしい者の姿を見ましょう。ダニエル書 7 章にあるように、獣の姿として登場します。

1C 獣の像

11 章において、二人の証人が出てきて、エルサレムは霊的に荒廃しているのを預言します。ところが底知れぬところから獣が出てきて、二人を殺してしまいます。二人は三日半経つとよみがえって、天に昇ります。そして 12 章においては、女として描かれるイスラエルが、竜によって命が狙われるけれども、彼女を滅ぼすことに失敗する場面があります。それで 13 章です。先に話したように、獣に自分の力と王座と大きな権威を与えます。そして、自分が死んだかに思われたのに、生き返ったので、人々は獣を賛美し、竜を賛美するようになります。そして、神を冒瀆する活動を開始します。「黙 13:5 この獣には、大言壮語して冒瀆のこぼを語る口が与えられ、四十二か月の間、活動する権威が与えられた。6 獣は神を冒瀆するために口を開いて、神の御名と神の幕屋、また天に住む者たちを冒瀆した。」

そして、もう一人の獣、偽預言者が出てきます。その獣が、初めの獣、すなわち反キリストを人々

が拝むように導き、反キリストの像を造らせ、それを拝むようにさせるのです。もし拒めば殺されます。また、獣の刻印が右の手か、額に押されて、その刻印のない者は売ることも買うこともできません。要は反キリストを拝み、反キリストの所有物にならなければ、生きることができないのです。

2C 大淫婦を乗せる者

そして、反キリストは、国々の王たちとの淫乱によって、巨額の富を得ている大淫婦を乗せた獣として、黙示録 17 章で現れます。その女を、途中で獣は他の王たちと共に倒します。おそらく、ここで獣は、経済や政治だけでなく、宗教もすべてを牛耳り、反キリストの世界的カルト宗教を作るのでしょ

3C 全軍隊を率いる反キリスト軍

けれども 19 章で、天から白い馬に乗って主イエス・キリストが戻って来られます。反キリストの率いる軍隊が戦いに挑みますが、口から出る剣で滅ぼされます。死体が積み上がり、それを猛禽が食べていく、神の大宴会が催されます。そして、獣は生きたまま地獄に投げ込まれるのです。「19:19-20 また私は、獣と地の王たちとその軍勢が集まって、馬に乗る方とその軍勢に戦いを挑むのを見た。しかし、獣は捕らえられた。また、獣の前でしるしを行い、それによって獣の刻印を受けた者たちと、獣の像を拝む者たちを惑わした偽預言者も、獣とともに捕らえられた。この両者は生きたまま、硫黄の燃える火の池に投げ込まれた。」

4A 多くの反キリスト

じっくりと反キリストを見ましたが、本文に戻ってください。「**反キリストが来るとあなたがたが聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現れています。**」と言っていますね。ここの「多くの反キリスト」とは一体何なのでしょう？ここでは、前に出て来る反キリストが、英語で言うならば、「ザ・反キリスト」と書かれていて、その後の多くの反キリストの前にはザが付いていません。つまり、前の方は、予め聖書で預言されていた反キリストなのですが、後の方は、反キリストと同じ流れにある偽預言者たち、ということができます。これを言い換えると、反キリストの霊があるとも言えるでしょう。この後でヨハネは、反キリストを偽り者と言い、「**イエスがキリストであることを否定する者**」「**御父と御子を否定する者**」と言っています(22 節)。

1B 反キリストの霊

これまでも、聖書の中に出て来た人物で、反キリストを予め示すような者たちが現れました。

1C ニムロデ

数々の町を建て、バベルの町を建てた、権力者ニムロデ(創世記 10 章)は、後に人々が神を否み、天にまで届く塔を建てようとしていく動きに加担していくので、反キリスト的な動きと言えます。

2C ネブカドネツアル

ネブカドネツアルは、金の像を造り、それを拝ませようとしてしました。「ダニ 3:1-2 ネブカドネツアル王は金の像を造った。その高さは六十キュビト、その幅は六キュビトであった。彼はこれをバビロン州のドラの平野に建てた。2 そして、ネブカドネツアル王は人を遣わして、太守、長官、総督、参議官、財務官、司法官、保安官、および諸州のすべての高官を召集し、ネブカドネツアル王が建てた像の奉獻式に出席させることにした。」これはあたかも、終わりの日に反キリストが自分の像を拝ませていく動きに似ています。

3C アンティオコス・エピファネス

そして先に話しましたように、アンティオコス・エピファネスは、ダニエル書の中で、まさに終わりの日の荒らす忌まわしい者の予兆となる人物として預言されていたのです。

4C 後世の指導者

こうやって、サタンが世の支配権を握ってから、反キリスト的な動き、反キリストの霊は働いていました。時々はその傾向が強まるのです。聖書時代は、まさに彼らはローマ帝国の中に生きており、ローマ皇帝は時に神格化され、キリスト者を迫害していきました。使徒時代のキリスト者たちは、皇帝ネロが反キリストではないか？とまで思ったそうです。

その後の歴史では、ヒトラーはまさに、反キリスト的でした。反キリストはユダヤ人を迫害しますが、ヒトラーはユダヤ人を完全に消滅させる最終計画を実行しようとして、六百万人が死にました。そして、かつてのローマ帝国と同じところを征服し始めました。北アフリカ、ヨーロッパの他の国々です。反キリストも攻めて行きます。ですから、当時のクリスチャンは、ヒトラーが反キリストではないかとも思ったのです。そして、共産主義の国々では、無神論のはずなのに、レーニンの像、スターリンの神格化、金日成や金正日の像への献花など、反キリスト的な動きをしているのです。

2B 引き止める者

そういったものを、テサロニケ第二 2 章では、「不法の秘密」と呼んでいます。「2:6-7 不法の者がその定められた時に現れるようにと、今はその者を引き止めているものがあることを、あなたがたは知っています。不法の秘密はすでに働いています。ただし、秘密であるのは、今引き止めている者が取り除かれる時までのことです。」ここで、パウロは、「引き止めているもの」について言及しています。不法の人が現れるのを引き止めているのです。私は、これが聖霊ご自身なのではないかと思えます。あるいは、地の塩と呼ばれているキリストの弟子たちです。神の側についている天使かもしれません。いずれにしても、神ご自身、また神に仕える者たちに働いている聖霊ご自身であると考えられるのです。

私たちがいることによって、反キリストの現れがかろうじて妨げられているということです。闇にあるものを光に出す、光の子どもとして歩みなさいとパウロは、エペソ書 5 章で勧めています。